学内NGO、ONE LOVEの軌跡に学ぶ、大学生の国際協力活動の意義と課題その一考察

玉城 直美

趣　旨

本稿は、学内NGO ONE LOVEの活動の始まりから終わりまでの９年間を記録するものである。参加していた学生が卒業を迎え、多くは社会人となりながら、その時の経験が今に何をもたらしているのか、当時と現在の想いをまとめてみる。またONE LOVEの周りの環境にも目をやり、学内NGO ONE LOVEに対する支援は十分であったのか、さらなる支援も必要だったのを合わせて検証している。

大学生の国際協力活動、NPO活動、ボランティア活動をキーワードに、その活動の教育的な意義と今後の課題に関して考察を試みるものである。

Title
Study of the Significance and Challenges of University Students' International Cooperation Activities as Learnt in the History of On-Campus NGO ONE LOVE

Abstract

This paper provides a record of the activities of ONE LOVE, an NGO based on the campus of Okinawa Christian University, for the nine years from its inception until closure. Although many of the students who participated in the organization have graduated and are now working members of society, their ideas, at the time they were associated with ONE LOVE and today as well, have been compiled as to what they believe their experiences have produced. The paper also takes a look at the environment in which ONE LOVE operated and analyzes whether the support provided ONE LOVE was sufficient or not as well as what further support was needed. This paper seeks to examine the educational significance and future challenges raised by ONE LOVE's activities against the backdrop of international cooperation, NPO activities and volunteering by university students.

はじめに

2004年、沖縄キリスト教学院大学の誕生から1年程経った頃、学内NGO ONE LOVEは当時、本学准教授の新垣誠先生を中心に誕生し、2014年の3月の9年間、学生主体のNGOとして活動を行った。任意団体からNPO法人格の取得を行い活動の幅も広がっていったが、最後には解散という形を選んだ。学内NGOとはいえ、学生主体のサークル活動とは異なっている。こちらの方が優れているとか優劣の位置づけではなく、大学環境の中で派生し、自分たちの力で国境を超え、継続的な活動をする組織が生まれた。2014年2月、最後の解散の会において、ONE LOVEの中心メンバーや、理事も顔を揃え、会の歴史を振り返り、それぞれこれから歩む道を応援しあう中、9年間の活動に幕を閉じた。

筆者はONE LOVEの初期の頃から相談役に始まり、NPO法人化されてからは、理事としてONE LOVEと共に歩いてきた。事務局員の中心メンバーとは活動の中で喜びや、多くの悩みにも触れてきた。しかし、解散時には理事の役割が果たせていたのだろうかという自戒の意味も込めて、本稿はONE LOVEの軌跡を残し、関わったメンバーへの総括の共有、および今後の本学学生の社会的な活動支援を継続的に行っていきたいと願いを込めての考察である。本稿をまとめるに際し、関わってきたメンバーにはアンケート用紙を通じて意識調査の実施、さらに事務局中心メンバーや、深く関わった教員、職員の方々には対面によるインタビューを行い、当事者および彼らを取り巻く支援者の声を反映させた。今年の2月の解散から約7か月経ち、調査からまとめまで、半年足らずの限られた時間となったため、本稿を第一回目のまとめとし、引き続き調査を行っていく予定である。

本稿の構成は、第一章がONE LOVEの設立から解散までの９年間の主な活動の歴史を年表でまとめる。第二章は、ONE LOVEに関わった学生メンバーの想いを活動前から活動中、そして活動を終えた今の気持ちを振り返ってもらったことをまとめた。またONE LOVE支援者（主に教員および職員）の思い、振り返りのインタビュー結果についても併せてまとめている。今回は具体的な学生の活動支援の方向性を指し示すことができなかったが、意識調査をメインとし、学生の学内NPOの活動に対する意義と可能性、さらには課題を踏まえて一考察を述べる。

第1章 学内NGO ONE LOVEの誕生と活動の歴史

第1節 学内NGO ONE LOVE誕生まで

学内NGO ONE LOVEの辿った変遷は誰かに強制されたわけでも、強いリーダーがいたわけでもなく、自然発生的に誕生した。中心的に参加したメンバーは一期生であった。2004年、沖縄キリスト教学院大学が新設される中、本学に大きな期待を背負った個性豊かな一期生が集った。その一期生を中心として、学内の授業の中で世界の貧困課題に触れ、教員や社会の影響を受け、実際にフィリピンやネパールへ飛び出しアジアの友人のために何かをしたい、遠い世界で起こっている不条理な現実に目をむけ、足元と世界を共に考えたいという学生グループONE LOVEが誕生した。

筆者とONE LOVEの関わりについて述べさせて頂く。当時、大学が設置され1年目辺りから相談を受け、国際理解・開発教育の出前授業、教材作りなどを通して関わるようになった。筆者は当時、沖縄県内のNGO団体の事務局長として活動しており、県内NGOの側面的なサポートというのも業務の一部であり、自身として若者の活動支援は、未来のNGO関係者を増やす意味でも重要であると感じていた。本学が３年目になり、国際協力関係の科目、NGO・NPO論などを非常勤講師として担当するようになり定期的な関わりを持つようになって以来、解散までの付き合いとなった。

設立当時のメンバーの様子を今でも鮮明に覚えている。放課後もしくは週末、自主的に集い、とにかく世界のことを学びたいという要望が寄せられた。当時、学校教育現場（小～高校）では総合的な学習の導入で、NGOと学校教育の連携が活発に行われる中、学校で学ぶ参加型教材が数多く生み出されていた。世界の不均衡をクラス内で体感する参加型教材「貿易ゲーム」[1]、「世界がもし100人の村だったら」[2]など集った学生に実施した。教材体験、そして振り返りを行っている最中から本気で怒り、あまりにも不条理な現実に涙を流す学生もいた。当時のメンバーはサークル未満の組織ではあったが、団体設立等の相談に何度か乗った。また彼らの活動の原動力となった、本学教員の新垣誠先生の役割も大きかったであろう。新垣先生の授業で、世界や沖縄の中で起こっている開発課題を深く掘り下げる度に、多くの学生は感銘を受け、私たちにできることはなんだろうかと一歩を踏み出すきっかけになっている声を当時の学生からよく聞いた。またONE LOVEという組織になり、歩き始めた当初は、国外のフィールドワークも共に足を運び、共に学び合う姿勢は学生に安心感と連帯の仕組みを提供していたといえよう。

サークル未満の活動から、２年足らずの間に定期的な学び合い、大学の海外ボランティア実習と併せてフィリピン等への渡航の機会、フェアトレードとの出会いで、教室の学びは海外に飛び出し、初めの一歩、二歩を駆け抜けていったように見える。

当時の参加しているメンバーはいわゆる普通の大学生で、学業、バイト、私生活に大忙しといった様子であった。まだサークル未満のこの取り組みが、9年間、社会的な影響をもたらす活動にまで発展するなど当時のメンバーは想像していたのだろうか、当時から関わっていた筆者はここまでの想像は出来なかったが、ただメンバーの純粋な気持ちや行動力、そして前進力には何度も驚かされ、何か形を成しえることの重要さよりも歩むプロセスに何か意味を見いだせたらと期待を込めて関わっていた。

第２節 ONE LOVEの設立から解散までの活動年表[3]

ONE LOVEがこれまで残してきた資料および聞き取り調査、筆者の記憶をたどりながら図１に活動年表をまとめた。主な活動遍歴が分かるものに限定している。特に設立した初期の頃や、解散前の頃は何度も話し合いを重ねる日々が続いていたことは伝えておきたい。勢いのまま設立し、最後もプロジェクトを放り出して解散をしたのではなく、重なる話し合い、地道な活動を重ねてきたのを筆者もみてきた。ネパール・フィリピンの活動を共に行っていた現地メンバーへの直接の報告、国内の理事会に対しても十分な説明責任を果たした上で解散に至っている。ONE LOVEの活動歴は、大学を飛び出し、地域とつながり、国境を越えた活動が多面的に広がった様子が見て取れる。また学生のボランティア団体から始まりながらも、社会的な注目を受け、様々な組

織や人とのつながりを持つ組織に成長していった。歴史年表で全てを表現できないところが非常に残念であるが、一つの活動史として記しておく。

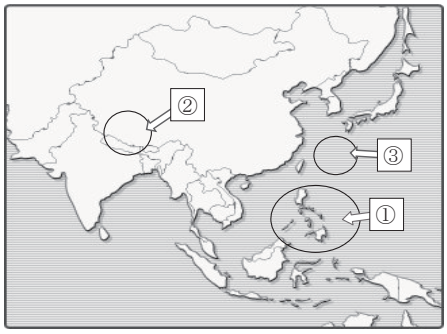
図1

2005 年	世界の課題を学び合う学習会を定期開催するメンバーが緩やかに集った
2005 年10月	学内NGO ONE LOVEとして発足
2005 年11月	学園祭内にて啓発活動を行うフェアトレード[4]ショップ＆カフェを開催
2006 年06月	自主勉強会が活発化していった
2006 年09月	フィリピンへの研修旅行を行う。マザーテレサの家、現地ローカルNGO訪問を行う。レイルロード[5]の人々と出会う（後のフィリピンにおけるパートナー団体となる）
2006 年11月	学園祭において、フェアトレードショップ＆カフェを開催
2006 年12月	「フィリピン・フレンドシップ」プロジェクトの企画を始める
2007 年02月	JICA沖縄、草の根技術協力事業[7]の採択を受け、フィリピンへ派遣される
2007 年	沖縄県内の小・中・高校への国際理解教育・開発教育の出前授業開始
2007 年9月	JICA草の根協力事業2回目の渡航、新商品の開発を行う
2008 年2月	大学の海外ボランティア演習の実習先としてMSCC6を訪問 ネパールの児童養護施設の子どもたちと交流が始まる。渡航後、 教育支援・生活支援事業を提案し、モノ作りを通じた協働事業が始まる
2008 年	フィリピン国のパートナー団体のレイルロードの人々が強制立ち退きにあう。 JICA草の根事業3回目の渡航にて、モニタリング調査でプロジェクトの 成果、メンバーの変化についてまとめる
2009 年03月	NPO法人設立のための準備会を開催
2009 年12月	NPO法人設立 総会 理事、幹事、役員体制がはっきりと決定し、固定化される NPO法人ONE LOVEの定款が作成される
2010 年	沖縄県よりNPO法人としての認可が下りる NPO法人ONE LOVE誕生。任意団体からNPO法人となる
2010 年02月	ネパールの支援団体の中心活動家を沖縄に招へいし、チャリティーイベントを開催。寄付金を募った
2010 年	「2010年度NGO長期スタディ・プログラム」事業を通じ（外務省主催） ボランティア・スタッフ1名がネパールのNGOで6ヵ月間の研修を実施
2011 年04月	事務局2名体制が始まる 事務局サポートメンバーは6名、卒業したOBが、２名体制で毎日事務局に 勤務し、法人化に向け組織、環境整備および書類整理を行いながら、 活動を展開していった
2011 年07月	やんばるター滝めぐりONE LOVE主催のエコツアー開催
2011 年07月	一か月間、ONE LOVEのネパール事業展示会を開催場所：vegi café SHANT（那覇市）対外的な場所においてネパールの支援団体の子どもたちの 作成したアクセサリー販売を行った
2011 年08月	教職を目指す大学生（大学内）に対し、国際理解教育の参加型のワーク ショップ授業を提供する。3回シリーズ
2011 年10月	辺野古ツアー開催。メンバーと共に平和について学び合う ネパールの支援団体活動家の招へいの為の資金造成のため、ハロウィンイベント 開催
2011 年11月	JICA沖縄主催、国際交流・協力フェスティバル内出展 ネパール支援のイベントを開催
2011 年12月	世界の国からメリークリスマスイベント開催。ネパールより支援団体の 活動家を招へいすることに加え、支援している国々のクリスマスを共に感じる ことで親子触れ合いのイベントとして学内体育館にて実施
2011 年	出前授業一覧（出前場所、日程、内容・タイトル） 沖縄国際大学（5/11）「ONE LOVE　活動紹介」 星槎国際高校（5/20）「フェアトレード」 泊高校（6/20）「ウチナーンチュと国際協力」 嘉手納中学校（6/22）「平和ってなぁに？」 豊見城南高校（7/19）「ウチナーンチュと国際協力」 糸満小学校（9/29）「もっと知りたい！アジアのともだち～フィリピン編～」 美東中学校（12/8）「私たちに出来ることってなぁに？いろいろな国際協力のかたち」
2011 年	活動サイト（ネパール、フィリピン）の現地の様子をカレンダーにして カレンダーの委託を依頼し、県内12か所（大学2、教会2、店舗8）へ委託 販売をお願いし、販路拡大を行っていった
2011 年12月	フィリピンのパートナー団体との関係再構築のために 3 名がフィリピンを訪問、話し合いを行った。（2010 年事業 NGO 長期スタディ・プログラムのフォローアッププログラムの活用）
2011 年	会員制度の誕生。正会員数は 20 名、賛助会員数 1 名、学生正会員数 8 名、みつばちボランティア約 10 名
2011 年 受賞歴一覧	「学生ボランティア助成事業」（財団法人学生サポートセンター）の助成を受け、活動を拡げた
	「ボランティア活動助成」（大和証券福祉財団）の助成により、夏休み体験ワークショップ「もっと知りたい世界の友だち、体験しよう世界の文化」を2日間かけて本学で開催。また、フィリピン出身のアーティストと沖縄県在住のフィリピンの方々とワークショップを実施
	「かめのり賞」（公益財団法人かめのり財団）を受賞。フィリピンでの青少年交流と相互理解に草の根で取り組む団体として受賞
	「西原町・青少年育成功労団体」（西原町青少年健全育成協議会）受賞
2012 年2月	ネパールの支援団体の中心活動家を沖縄に招へいし、チャリティーイベントを開催。寄付金を募った（「国際交流事業助成金」（沖縄県国際交流・人材育成財団）の助成金も活用）
2012 年09月	現役学生5名、OBメンバー1名にて、フィリピンのツアーを行った（9日間） マザーテレサの家、ホームスティ、パートナー団体との交流実施
2012 年	活動紹介・講演一覧（場所、日程） 児童養護施設「愛隣園」（2/13） 西原東中学校（2/15） 牧港小学校（2/17） 陽明高等学校（2/18） 第 16 回豊見城市生涯学習フェスティバル（2/18） 首里教会（2/19）（上記講演会は、ビシュヌ・パラジュリ氏による） 出前授業一覧（出前場所、日程、内容・タイトル） 牧港小学校（1/18）「世界がもし 100 人の村だったら」 陽明高校（1/25）「わたしたちにできることってなぁに？～色々な国際協力のカタチ～」 あいのき学童、寺子屋学童（1/30） 「バナナのほんと」「世界がもし 100 人の村だったら」 西原保育連絡会（6/27）　「バナナのホント」 沖縄キリスト教学院大学（教職課程・道徳授業）（7/4） 「貿易ゲーム～国際協力と私たちの行動のあり方」 さくらんぼ学童（7/30）　「甘いチョコの苦い現実」 夏休みワークショップ（8/7, 8/8） 【小中学生向け】「のぞいてみよう！バナナのホント」 【高校生向け】「知ってる？！甘いチョコの苦い現実」
2013 年02月	事務局員交代を行う 約２年間活動を行ってきた事務局員現役学生および卒業生との間でONELOVEに関わる思いの違い、関わり方、ネパールやフィリピンのパートナー団体との関係見直しなど、この頃から組織のあり方を巡って何度も話し合いを重ねていた
2013 年04月	新事務局着任 非常勤の教員職との兼務の中での活動開始。旧事務局の思いを引き継ぎながらも新体制構築を試みるが、現役学生のコアメンバーの定着、積極的な活動を見いだせなかった。2013年後半には解散を決定し、NPO法人の解散に向けての必要手続の準備を行った
2013 年05月	「女性活動家から学ぼう！本土復帰について考える」講座実施 講師：高里鈴代さん
2013 年06月	「沖縄を学ぼう！平和研修ツアーin伊江島」講座実施 講師：謝花悦子さん
2013 年	「全労済地域貢献助成事へ（環境分野）」（全国労働者共済生活協同組合連合会）の助成決定を受け、教材作成、ワークショップ、出前授業等への活用を図る
2013 年09月	「生物多様性ってなぁに？泡瀬干潟を体感しよう！」講座実施 講師：屋良朝敏さん、小橋川共男さん
2014 年02月	NPO法人ONE LOVE 解散 最後は解散総会を開催し、これまでの歩みを振り返り、解散総会にて承認、解散となった

第２節 ONE LOVEの活動範囲および内容について

前節年表に加え、活動詳細についても記録していく。ONE LOVEの特徴は、活動場所は海外の支援活動に限らず、沖縄にもしっかり拠点を持ち、活動を行っていたということである。フィリピン、ネパールの現実に起こっている出来事をしっかり沖縄の子どもたち、若者に伝える活動を大事にしていたということ、そしてその根本課題は、沖縄の開発と共通点があることを実感し、足元の沖縄の問題にも取り組む活動を行ってきたことである。以下図２に活動場所を記し、その後に活動内容の大きな柱をまとめた。

図２．活動地域



活動地域
①フィリピン
②ネパール
③沖縄

それぞれの支援活動は下記ご参照

①．フィリピン事業（フィリピン・フレンドシッププロジェクト）フィリピン・ブラカン州

・対象：スラム街に暮らす青少年団体15歳から23歳の約22名〔支援団体名YOGA（Youth Organization Group in Action）／FOLP（Friendship One Love Philippine）〕の2つの団体と共に活動を行った。

写真1：フィリピン、ネパールのパートナーメンバーにより制作されたアクセサリー

写真2：フィリピンのパートナー団体

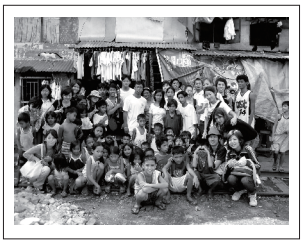


写真3：設立当時のイベント開催風景

・内容：彼らの手作りの商品（携帯ストラップ・お箸ケース）を、沖縄県内で販売。団体活動費や生活費にあてることを目的に売上金の海外送金を行っていたが、長期的な支援を見据え、事業内容を拡充していくための議論に入った。しかしながら、現地メンバーの環境が変化したこと、ONELOVEの体制も不安定だったこともあり、事業の目的や継続性を話し合い、最終的に今後の事業継続は行わないこととなった。

②．ネパール事業 Morning Star Children'sCharity 奨学金（ネパール・カトマンズ市）

写真4：ネパールの支援する子どもたちと共に

・対象：モーニングスター・チルドレンズホーム

十代後から二十代前半の若者たちを支援した。貧困等の様々な理由で家族と暮らすことが困難な子どもやストリートチルドレンを受け入れ、食事や教育、寝床を子どもたちに提供し、支援する児童養護施設。

・内容：初期は、彼らの作成した５種類のアクセサリーを、県内で販売。子ども達の大学の学費や緊急時の費用にあてることを目的に海外送金を行っていたが、その行為が児童労働に抵触する可能性や、現地施設長より子どもたちには（働くことができる年齢でも）一番に勉学に励んでほしい為、ホームの為に働くことはして欲しくないと話があがった。その為、アクセサリー販売から支援金を送るという行為に変わった。資金源は、沖縄県内で集められた寄付金、会費、事業収入などを充てた。2008年に初めて施設を訪れた際に、寄付金のみで賄われる運営の厳しさを知り、子どもたちに対する資金援助を決める。子どもたちの人数は15名〜56名の範囲で行った。2013年にONELOVEの解散が決まったがMSCCへの支援は続けたい思いが一致したので、フェアトレード団体ネパリバザーロに協力を要請し、ネパリバザーを通して、これまでと同額の寄付金を毎年送金してもらうことになり、活動終了となった。

③．沖縄における事業・出前授業／沖縄県内での開発教育支援活動（各公立校への出前授業）

写真5：県内学校機関への出前授業の様子

・対象：小・中・高校生、大学生、社会人

・内容：海外での経験及び、参加型を取り入れた授業を行った。また、オリジナルの教材研究もおこなった。貧困問題への意識の向上、同じアジアに暮らす若者同士の相互理解に努めた。

・国際協力を考える事業（ONE LOVE勉強会）
・対象：学内大学生、県内学生、社会人
・内容：県内、国内の開発の平和、基地、ジェンダー、自然環境問題等、開発の課題に取り組む専門家の話を聞きき、実際に現地を訪問する学びあい。

・学内・地域との共同プログラム
・内容：県内のフェアトレードショップやNGO等と協働で、世界の問題と私たちとの繋がり考えるイベントを企画、開催した。また、大学内のイベントでは、活動紹介を通して啓発活動を行った。

沖縄キリスト教学院大学・オープンキャンパス、沖縄キリスト教学院・学園祭、首里城祭、西原町「ピースアート」、いのちをつなぐアースハーモニー、桜坂劇場上映会商品販売や活動紹介、トークショー「闇の子供たち」「未来を映した子どもたち」「おいしいコーヒーの真実」等

以上

2004年から2009年までNPO法人化[8]に向けて、活動を展開した主要なメンバーは、1期生をはじめとした初期の立ち上げ者であった。その後、任意団体からNPO法人化を行い、収益事業、助成金等を獲得しながら、NPOという一つの社会的起業としての自立を目指していった。着実に資金獲得を行いながら、活動、事業拡大を行うことが出来たが、完全な自立は困難であること、初期の立ち上げメンバーの大半が卒業、就職という新しい社会との出会いの中で、新たな学生の入会、活動への巻き込み、卒業メンバーと新学生メンバーと、ONE LOVEの活動の新たな方向性を築くことが困難になり、2014年2月に解散を迎えることになった。

写真6：ONE LOVEを立ち上げた1期生～2期生のメンバー

第２章　学内NGO ONE LOVE参加者に対する意識

第1節　ONE LOVE参加者に対する意識（アンケート）結果

本稿を進めていく上で、最も重要であるのが元ONE LOVE参加メンバーの意識であると思い、解散から半年経った時点でアンケート調査を行った。本調査は元ONE LOVEメンバーの事務局員の方に依頼を行い、アンケート電子ファイルをメーリングリストや、SNS等の連絡ツールを通じて一斉に流し、回答は筆者へEmailで回答するという方法を採った。調査期間は2014年9月～2014年10月中旬という大変限られた期間での調査となった。回収されたアンケートは総計18名であった。県内外、海外在住者の元メンバーからの回答を得られた。図表３には設問本文を、その次頁にはアンケート全設問集計結果および解説を掲載した。

図3 ONE LOVE参加メンバーアンケート設問本文

1).あなたの入学年月日を教えてください。
答：　　年入学

2).あなたのONE LOVE活動期間をお教えください
答：　　年　　月　～　　年　　月

3).あなたの現在の社会的な立場および社会経験をお聞かせ願います。
①社会人　　年目
②社会人等の立場　　□正職員　　□家事・育児　　□進学中
□臨時・非常勤職員　□パート・アルバイト　　□求職中　　□無職

4).あなたが大学に沖縄キリスト教学院大学に入学した大きな理由を教えてください。
ふさわしいものに☑お願いします。(複数回答可)
□なんとなく　□友人と同じ　□距離　□偏差値　□他人のすすめ
□社会的な活動・ボランティアに興味があって　□サークル活動　□語学習得
□海外留学　□その他（具体的理由：　　）

5).学生生活で最も印象に残っていることを教えてください。ふさわしいものの順に順位をつけてください（上位5番目までお応えください）最も順位が高いものを1としてください。
（　）友人と過ごしたこと　（　）教員と過ごしたこと　（　）バイト
（　）サークル活動　（　）社会的・ボランティア活動　（　）語学習得
（　）一般教養　（　）専門的知識の習得　（　）休学した時間（　）
海外留学（　）その他（具体的に：　　）

6).ONE LOVEの活動を行う前に、ボランティア活動に対するイメージはどのようなものでしたか？
ふさわしいものに☑お願いします。(複数回答可)
□偽善的 □進路・就職に有利 □自己犠牲 □時間・お金に余裕があるものが参加するもの
□社会勉強 □誰かの役に立つ □自分が成長する □専門性を学ぶ □楽しい
□責任感が高まる □大学の授業以外での豊かな学び
□その他（具体的理由：　　）

7).ONE LOVEへの参加後、ボランティア活動に対するイメージはどのように変化しましたか？
ふさわしいものに☑お願いします。(複数回答可)
□偽善的 □進路・就職に有利 □自己犠牲 □時間・お金に余裕があるものが参加するもの
□社会勉強 □誰かの役に立つ □自分が成長する □専門性を学ぶ □楽しい
□責任感が高まる □大学の授業以外での豊かな学び
□その他（具体的理由：　　）

8).ONE LOVEの活動を始めるにいたったきっかけを教えてください。
ふさわしいものに☑お願いします。(複数回答可)
□教員のすすめ □友人のすすめ □授業で取り上げられたから
□大学に入る前から決めていた□覚えていない □学園祭 □チラシなどをみて
□その他（具体的理由：　　）

9).ONE LOVEの活動を通して最も学んだことは何か。
ふさわしいものの順に順位をつけてください（上位5番目までお応えください）最も順位が高いものを1としてください
（　）プレゼンテーション力　（　）ファンドレージング(資金獲得)力
（　）キャリアビジョン・来を考える力　（　）ファシリテーション力　（　）語学力
（　）交渉力　（　）企画・調整力　（　）自己実現　（　）その他（具体的

10).ONE LOVEの活動を通しての達成感は何%ですか？
（　　%　）
達成度 100 %に満たなかった場合、何がたりませんでしたか？自由に足りなかったことを書いて下さい（自由記載）

11).ONE LOVEの活動を通して、きつい、続けたくない、やめたいと感じた原因は何でしょうか？
（上位5番目までお応えください）最も順位が高いものを1としてください。
（　）あまり感じたことはない　（　）時間を要する　（　）人間関係がきつい
（　）私生活の時間があまりない　（　）業務量が多い　（　）語学力が乏しい
（　）資金力の弱さ　（　）ゴールが見えない　（　）就職が決まっていない
（　）メンバーの定着　（　）大学を含む、側面的な支援
（　）その他（具体的に：　　）

12).ONE LOVEの活動を通して、これがあればもう少しあったらと思う支援、仕組みがあれば教えて下さい。（複数回答可）
（　）よくわからない　（　）人の循環・世代交代　（　）大学のより手厚い支援
（　）資金援助　（　）業務量の削減　（　）相談相手の固定化
（　）その他（具体的に：　　）

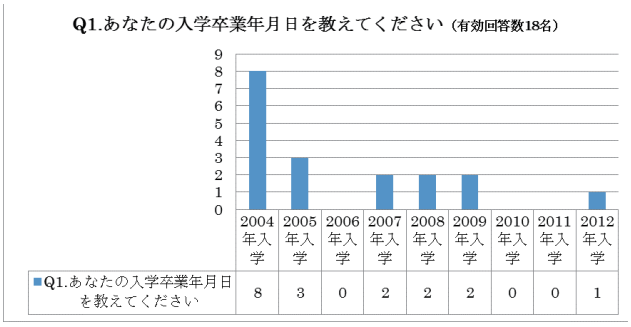
13).ONE LOVEの活動の中で活動をしていた経験、現在の状況の中で生かされているなと感じていることはありますか？（複数回答可）
□特にない □人間関係のつくり方 □キャリアビジョン・将来を考える力
□ファシリテーション力 □語学力　□交渉力 □企画・調整力
□その他（具体的に：　　）

14).将来、またONE LOVEのようなNGO/NPO活動に携わって行きたいと思いますか？（複数回答可）
□今はわからない □積極的に関わっていきたい
□時間的に余裕があれば関わっていきたい □関わりたくない
□その他（具体的：　　）

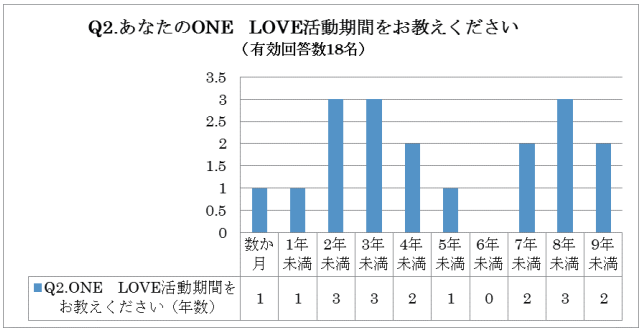
15).ONE LOVEの活動から離れた現在、あなたは何を感じていますか？（自由にお気持ちをお書きください）

以上

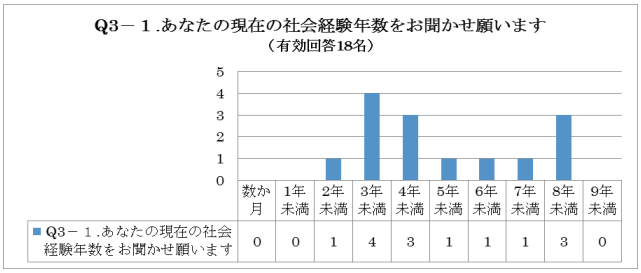
アンケート回答および筆者解説

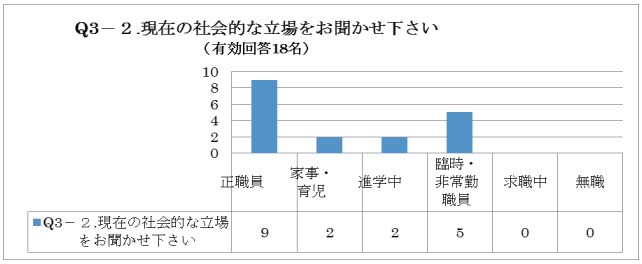


解説：有効回答者の多くは2004年入学者、つまり本学の一期生であった。回答者の多くの方々は事務局および理事など主要な役割に何らかの形で携わっていた方々である。一期生を主要メンバーとして立ち上げたONE LOVEであったが、構成メンバーも一期生が非常に多かった。



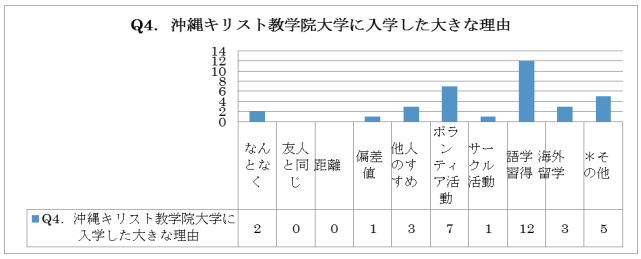
解説：活動歴は2～4年未満と、2～9年未満の２つの層に分かれているが、学生時代のみを活動したものと、卒業後もずっと事務局に関わったものに分かれていることが分かる。回答者は数回参加しただけのメンバーではなく、少なくとも学生時代には週に数日ONE LOVEに時間を費やしたものが多かった。



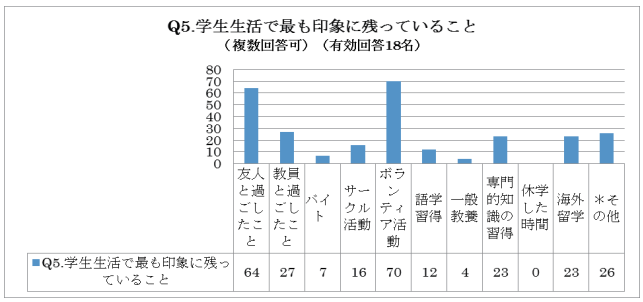


解説：卒業後、多くのメンバーは就職、進学、結婚という新しい環境に身を置いている。職業の臨時・非常勤職員の多くは、教師を目指すもの、別の組織にて正社員を目指すものもいた。進学も含めて、社会人として自分の進むべき道を見据え、しっかりと社会に歩みだしているのが見て取れる。

本アンケートの最後のコメントからも読み取れるが、ONE LOVEの活動を通して、自分の進むべき道が見えてきたメンバーは非常に多い。就職先が見つからない、または難関の就職先であっても、明確な目標を持つ者がほとんどであり、しっかりと自分の進むべき道に着実に進む者が多いことが見えてくる。活動の中で培ってきたコミュニケーション能力、ファシリテーション技術、交渉、そして忍耐力等はそれぞれの現場でしっかり生かされているといえる。



＊その他：教職免許／四大学に対する期待／保育士・幼稚園資格／高校時代に新垣先生の授業を受講してフィリピンスタディツアーに参加したいと思った／NGONPOについて学べると思ったから

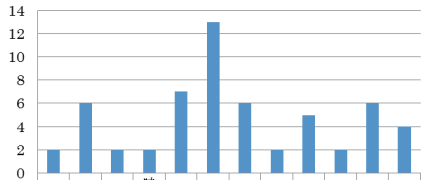


＊その他：ONE LOVEの活動(3名)／自分の時間を自由に使える／自己啓発時間／ライブの時間／考えを共有できる仲間と出会えたこと／学校のイベント参加

解説：ONE　LOVEメンバーの入学目的の一つに、ボランティア活動を期待するものが多い。ボランティア関係の科目を国内で、ボランティア実習を海外で体験しながら国際ボランティア実務士の資格が取得できることを意識して入学し、そのボランティア分野での経験や学びが印象に残っているということであると思う。

また「友人と過ごしたこと」をあげる者の多くは、ONE LOVEの活動を通して得られた友人との関係性をあげ、ONE LOVEの活動経験および友人との関係が大きなものを与えたようだ。

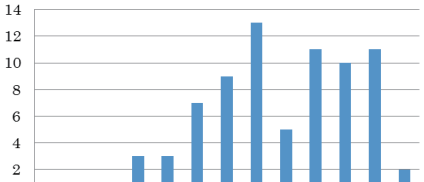
Q6.ONE　LOVEの活動を行う前に、ボランティア活動に対するイメージ（複数回答可）（有効回答18名）



	偽善的	進路・就職に有利	自己犠牲	時間・お金に余裕があり参加	社会勉強	誰かの役に立つ	自分の成長	専門性を学ぶ	楽しい	責任感が高まる	授業外の豊かな学び	＊その他
Q6.ONE　LOVEの活動を行う前に、ボランティア活動に対するイメージ	2	6	2	2	7	13	6	2	5	2	6	4

＊その他：困っている人を助けるため／お手伝いをするもの。何かを一緒にがんばること／強い意志がないと続かない／

Q7.ONE　LOVEの活動への参加後、ボランティア活動に対するイメージの変化について（複数回答可）（有効回答18名）



	特に変化なし	偽善的	進路・就職に有利	自己犠牲	時間・お金に余裕があり参加	社会勉強	誰かの役に立つ	自分の成長	専門性を学ぶ	楽しい	責任感が高まる	授業外の豊かな学び	＊その他
Q7.ONE　LOVEの活動に参加後、ボランティア活動に対するイメージの変化について	0	1	1	3	3	7	9	13	5	11	10	11	2

＊その他：覚悟と責任感がなければ続かない／一人ではできない／継続することの大切さを学ぶとともに、その難しさも感じた／ボランティアは「誰かのため」にやるのではなく、社会で自分がどのような役割を担っているのかという大きな視点と理由づけをしっかりして活動することができるようになった。それはただ単に僕が国際協力に興味があったからかもしれません

解説：Q6とQ7の質問項目に対する、意識の変化は興味深い。ボランティアに対するイメージと実際に参加してみた結果の思いの変化を問うものであった。事前のイメージとしては「誰かの役に立つ」という他者支援の視点であったが実際に参加した後に感じることは「自分の成長」「楽しい」「責任感が高まる」「授業外の豊かな学び」という個人の成長につながる声が多くなっている。

また＊その他の回答でもあるように、ボランティアは「誰かのため」にやるのではなく、社会で自分がどのような役割を担っているのかという大きな視点と理由づけをしっかりして活動することができるようになった。

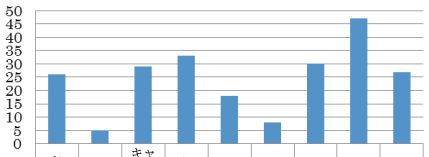
NPOとして活動していくプロセスの中で、社会的な役割、自分自身の立ち位置を認識しながら組織が成長し、ひいては個人の成長、自立した市民や社会が成長していくことにつながっていくと筆者は感じている。ONE LOVEの活動に参加したメンバーもその活動の中でしっかりと成長のプロセスを歩んでいったと言えよう。

Q8.ONE　LOVEの活動を始めるにいたったきっかけを教えてください。（有効回答18名）

	教員のすすめ	友人のすすめ	授業で取り上げられたから	大学入学前から決めていた	覚えていない	学園祭	チラシをみて	＊その他
Q8.ONE　LOVEの活動を始めるにいたったきっかけを教えてください。	4	5	8	3	0	1	2	4

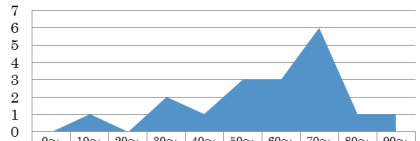
＊その他：友人たちが楽しそうに活動しているのをみて／フィリピン実習を経験して／海外ボランティアに興味があった／熱いハート

Q9.ONE　LOVEの活動を通して最も学んだことは何か。（複数回答可）（有効回答18名）



	プレゼンテーション力	資金獲得力	キャリア・将来を考える	ファシリテーション力	語学力	交渉力	企画・調整力	自己実現	＊その他
Q9.ONE　LOVEの活動を通して最も学んだことは何か。	26	5	29	33	18	8	30	47	27

Q10.ONE　LOVEの活動を通しての達成感は何％か？（有効回答18名）



	0～10%	10～20%	20～30%	30～40%	40～50%	50～60%	60～70%	70～80%	80～90%	90～100%
Q10.ONE　LOVEの活動を通しての達成感は何％か？	0	1	0	2	1	3	3	6	1	1

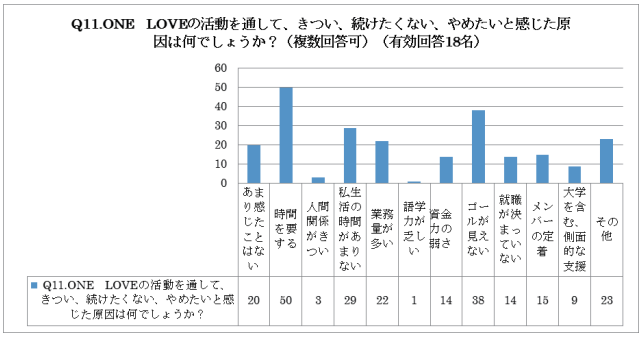
達成度100%に満たなかった場合、何がたりませんでしたか？（自由記載）ONELOVEの活動を通して、これが社会の為になったと自信をもっていえることがまだできない／アイディア、ユーモア／誰か別のひとにやってほしいと、無責任になってしまった／ストレス耐性／勢いだけで始めることが多く、計画性が足りなかった／きつい、続けたくない、やめたいと感じたことはありません。ただ、仕事との両立で毎回の活動に参加するのが難しく、ついていけない自分がいた／業務の負担がある特定の先輩に偏っていることがしんどそうだった。だからといって自分が助けられるわけでもないのでそこが一番しんどかった。

解説：Q9、ONE LOVEの活動を通して学んだこと、Q10、ONE LOVEの活動を通しての達成感に関する回答。

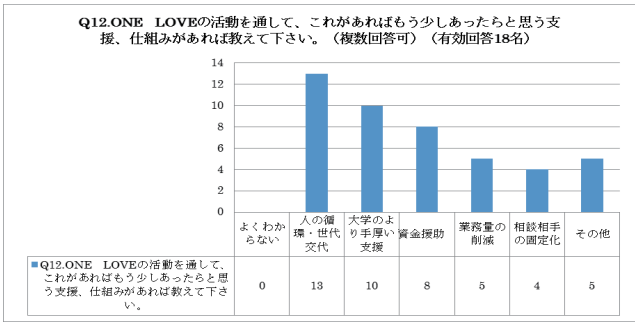
Q９への回答は、活動を通して自己実現、ファシリテーション力、キャリア・将来を考える、プレゼンテーション力と

続いている。参加学生の多くは社会の中の不均衡、フィリピンやネパールの友となり支援をしていた幼い子どもたちのために何かをしたいと願って活動した集団である。普通ならばメディアの世界で取り上げられているような国際協力活動であり、小さな活動団体がそこまでできるとは活動当初予想もしていなかっただろうが、その思いを小さな歩みでありながらも実現できたことは何よりも達成感として得られているのだろうと予想する。その中で多くの学生、関係者に活動を伝え、支援の輪を広げるためにファシリテーション、プレゼンテーション力が自然と身につき、一人ひとりの技術となっていったといえよう。

Q10の達成感は60～80％の達成感を回答する者が多いが、中心メンバーからの回答では、50％以下を回答するものが数人おり、やればやるほど、まだ足りない、やれていないという責任感と重責感がその意識につながっていったのではないかと考える。中心メンバーの数人の意識は学生団体だからというより、NGO活動を行う場面でよく見られる意識であると感じている。正義感が強く、社会を変えたい、そのために己がもっともっと努力しなければならないという意識である。しかし向き合う社会の課題の大きさと己の小ささの対峙の中で燃え尽きてしまうという現象である[9]。本活動を通して数名は燃え尽きて活動を終了してしまったことが大変残念な結果である。



＊その他：社会人として時間が作れずにつらくなった／同じような立場の人がいなかった／楽しむことよりも義務感の方が多くなった／体力面／続ける気持ち／ ONELOVEをどのような団体にして、自分はそこで何をしたいのか、明確なビジョンが持てなかった／ボランティア活動やNGOの運営や活動についての勉強　YOGA・FOLPに支援が必要だったのかちゃんと分析していなかったし、その方法がわからなかった、自分たちのやりたいことを押し付けてしまったと思うことがある

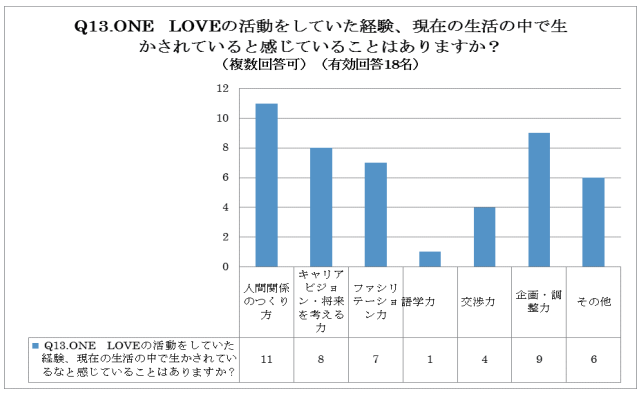


＊その他：社会的な活動と授業との連動／同世代との連携／悩みの共有／事務所がオープンな形で開いているとよかった／具体的で持続可能なゴール

解説：Q11、Q12の質問は、解散に至った経緯と、ONE LOVEに対する活動支援があったのではないかという模索の中おこなった。活動を続けていくことが困難になった理由として多くのメンバーは卒業前後の就職活動で活動の時間確保が厳しくなり、卒業と共に活動から遠ざかっていく状況であった。それが悪いということではなく、当前の状況であり、一人ひとりが分かっていた状況であったといえる。

もう一つ「ゴールが見えない」「世代交代」に関しての問題意識を上げる者が多かった。学生団体の一つの利点としては、常に多くの参加者を得られるチャンスがあるということ、しかしそれは期間限定である。人材の定着は、学生団体であれば必ず抱える課題の一つである。また、人材の入れ替わりが激しいということは、新しい視点で変化し続けることができるが、社会的使命、目標や活動内容の共有がしっかりなければ組織の方向性がぶれやすい。特に、ONE LOVEの活動はネパール、フィリピンという海外を軸とした活動があり、それを足元の沖縄と連動させる仕組みをとっていた。海外があっての沖縄となると、海外の活動サイトの状況の変化に活動が連動するということ、海外に行かなければ活動が成り立ちにくいという大きな側面をもっていた。

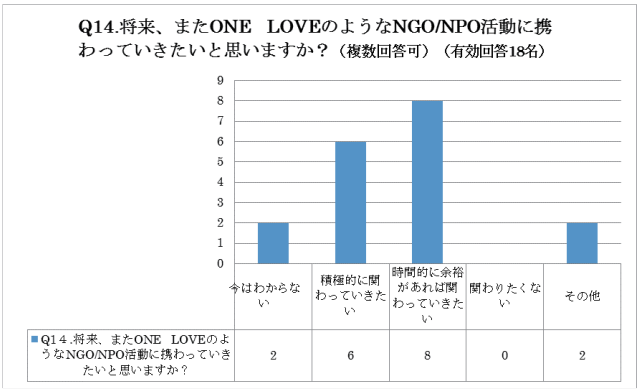
人材が入れ代わり、海外へ行ったメンバー、行けない・行っていないメンバーとの意識のかい離から、何を目標に、足元の沖縄で活動すべきか見えなくなっていたのではないかと考える。



＊その他：社会問題を考える力／伝える力／コミュニケーション力（３名）／相手を思いやる気持ち（2名）／日々の暮らし方／感謝の気持ち／出前授業での教材作成力

解説：Q１３は、ONE LOVEの経験が現在どのように活かされているのか問うものである。活動を行う中で学生間の関係、フィリピン・ネパールの様々な環境の中で暮らす者との交流、支援活動、この活動や事業を進めていくうえで関わってきた大人、マスコミ、関係機関がこの9年間で蜘蛛の巣のようにつながり、広がっていったと思われる。また国際協力・交流関係の中で、何をもってフィリピンやネパールの友人たちと対応な関係を維

持していくのか常に議論を交わしていた。その一つの技術としてファシリテーション力を身につけていったことが考えられる。社会の中で求められるそうしたソーシャル技術が一人ひとりに身につき、活かされていることはONE LOVEの活動の賜物と考えられる。また、「キャリアビジョン、将来を考える力」に役立っているという回答が多いのは、ONE LOVEの活動は、事務局、教育班、マーケティング班、出前授業や勉強会のグループなど、活動の中で様々な役割を担っていた。その経験が、自分の得意分野を生み出し、それが強みになっていったといえる。その経験が、社会の中でどういう職業につきたい、その中で自分の果たす役割を思考する力も身についているといえるのではないか。



＊その他：仕事との両立を考えてできることをやっていきたい／現在NPOで勤務している。解散はしたけれどこれからもONE LOVEと。またはONE LOVEとつながりのある団体（ネパリなど）と携わっていきたい。

Q15. ONE LOVEの活動から離れた現在、あなたは何を感じていますか？（自由にお気持ちをお書きください）（自由記載）（有効回答18名）

前頁までのQ1〜14まで、多くの質問に対しても様々な想いやONE LOVEの活動から何を得られたのか読み取れるが、最後に自由記載の欄を置き、それぞれの気持ちを記入して頂いた。一人、ひとり、本当にONE LOVEを通した学び、メンバーやフィリピン・ネパールの友人たちに対する思い、または今でも生き方に反映されている思いや反省・後悔に対する素直な気持ちが綴られていた。著者の私が分析を加え、途中カットをすることが大変忍びない気持ちになった。多くの紙面を割くことになるが、今回はONE LOVEの活動の歴史を記すという意味でお許し頂きたい。ただ、掲載を行っていく上で、なるべく特定の自分物が断定されないような工夫や、全体の文章の形式を揃えて、得られた回答意見を以下の5つの視点で分類し、それぞれの意見を掲載した。

1. ONE LOVEの活動を通して自己が高まった
2. 就職、社会経験に対する影響や学びを与えてくれた
3. 解散に伴う心残りや課題点
4. 将来に期待を込めて

5. 大学への提案

自由記載のまとめを以下に記載する。

1. ONE LOVEの活動を通して自己が高まった

- 「現在の私―未来の私」が豊かに過ごす上では欠かすことのできない要となっている
- 相手を思いやる心
- 共有すること（物や感情）で得られる幸福感
- 伝えるのではなく「伝わる」ことの意味
- 物質的なものではない本来の豊かさ
- 物事の根本を考えること
- 一人ひとりが伸びのびと働ける環境づくり、雰囲気作り
- 相手の本音の引き出し方
- 学生時代は学生の本業と言われる「学業」とは全く別のもの、さながら副業としてONE LOVEに関わっていたと思う。バイトもあまり積極的にしなくても許される環境だった自分だからその関わりができたと思う。副業としてすでにバイトをしていた、しなければならなかったメンバーは、同じ活動をしていてもモチベーション維持は比較にならないくらい大変だったと思う。
- 今まで接することのなかった後輩たちや、大学外の方々、そして海外の方とコミュニケーションをとることができ、自分の世界観や、物事を考えるうえでの視野が一気に広がった。ONE LOVEとは別の活動を行っているNGO団体にも興味を持ち、フィリピンでの台風被害などについても、自分事のように心配になりました。その点は、社会人になっても、自分の生活の中で生きているものだと感じている。
- 今でもずっと友人として繋がっていられる事や経験は、何にも変えられない私の財産である。私は高校のとき退学寸前で、友人と過ごし運よく大学に入ったが、それが私にとって人生のターニングポイントとなる程、初めて学びや、勉強が楽しいと感じた。ONE LOVEを通して出会った沢山の人達からの学は、たとえ小さな事でも今でも生きている。
- 何も無いところからみんなで1つのものを作り上げていくということ、考えを具体化、実現化することの難しさや達成感など、普通に大学生活を送っていたら体験することもなかったと思う。
- メンバーで気持ちを共有しながら活動を行っていた時は、団結力があり、皆で一緒に目標に向かってチャレンジしている毎日がとても充実していて、楽しかった。今思うと、あの時に楽しさを感じていたのは、特に、コミュニティートレードを通して現地の人々の生活を改善した

いという、見えやすいビジョンがあり、それに向かっていたからだと思う。

・この大学に入り、ONE LOVEに出会うまでは、自分自身に自信など持てず、思ってはいても実際に一歩行動に踏み出す勇気もない19歳だった。しかし、小さな大学ながら、広い世界にひらけた大学で、多くのことを学び、活動の中でいろんなことを経験し、仲間と共に必死に取り組んだことは、私自身の自信につながり、自分の視野をより広げるための次のステップへと踏み出す勇気になった。

・ONE LOVEに参加してものすごく自分が変わった（いい方向に）と強く感じている。自分のやりたいと思うことに取り組めた大学4年間は、本当に充実していたし、ONE LOVEでなければ経験できなかったことなので、この出会いを作ってくれたキリ学と先生方には本当に感謝している。

2．就職、社会経験に対する影響や学びを与えてくれた

・私たちの生活とは一見関係のないようにみえる「発展途上国の人々の暮らしや問題との密接な繋がり」で学んだ経験が、私に物事への「貪欲さ」を与えました。どのような仕事にも一生懸命取り組む姿勢、年や立場関係なくどんなヒトからも学ぼうとする姿勢の基盤となっている。社会人1年目の時、全く業種の違う４つの現場をまわった。3か月間で業務内容や従業員や店の雰囲気に合わせるのは難しく何度も妥協しそうになったが、どこの環境に身を置いても大事なのは「コミュニケーション」「物事に取り組む姿勢」である。ONELOVEで習得した成果として、幸いにもどこの現場からからも高い評価を頂いた。

・現在、重症心身障害者施設で働いている。国内の方を対象に支援を行っており、「寄り添っていく」というのは、一言でいえるほど簡単なものではないと実感している。むしろ、しんどい方が多いのでは…（ボランティアではなく、仕事として活動しているのでそうなるかもしれない）。自立支援をしてみたい。寄り添うような支援をしてみたい。将来は沖縄に貢献できるような人材になりたい。海外との交流も絶やしたくない（外国人スタッフと一緒に働く楽しさ、しんどさ）。しんどい側面にも目をそむけず挑んでみたい、技術も習得したい。社会福祉を勉強してみたい。もしかしたら医療も。そんな想いで仕事をできているのはONE LOVEやメンバー、フィリピン・ネパールのみんなのお蔭だ。

・今の仕事に就くことができたのも、学生時代ONE LOVEとして活動したすべての経験や学びがあったからだ。日々、子どもたちと関わりながら、悩みや苦しさ、葛藤は常々で、それ以上に彼らから元気をもらうことが何よりも私の支えになっている。

・解散後、中学校で英語教師として指導している。未熟でまずは学校現場の仕事を覚えることが先になり、正直なところなかなかこれまで出前授業でやってきたONE LOVEらしい授業をすることができていない。私たちが学生の頃目標としていた、世界から貧困をなくすというもの、これは現実にすることが難しい。しかし、ONE LOVEの出前授業でいつも伝えていたこと、「知るということ」これを今でも中学生には伝えていきたいと思っている。私たちの時代でダメなら次の世代へ、世界中の子ども達、日本の子ども達、沖縄の子ども達、私の学級の子ども達、一人でも多くの子ども達に世界の現状を知ってもらう。そこから自分たちのやるべきこと、できることを見つけていってほしい。それを伝えるために教員の道に進んだ。ONE LOVEは解散となり、自分のことを考えると当時の目標は残っており、その思いがどこかで私を教員への道へと導いてくれ、これからも何をするにしてもきっとONE LOVEの活動に通じるものをやり続けるだろうと思う。

・学生時代に本業以外で、ボランティア・社会活動をすることが自らを豊かにさせるという体験をできたことは非常に重要だった。本業以外に目を向け、アンテナを巡らせるくせが身体にしみつき、それらが本業での自らの活動を豊かにさせてくれている。人生の一時期でも積極的に世界の諸問題に取り組んだという経験は、世界中のニュースや事件を、当事者として感じさせる重要な経験となっている。

・現在、教育現場で働いている。子どもたちと接するとき、支援や指導を行うときに思い出すのがONE LOVEの活動である。その活動は、私の心を育んでくれ、人が人として生きることで大切なことを教えてくれた。生徒に対し、同僚に対し、保護者に対しても、活動での学びを生かそうと心がけている。それが、今の私にできることの一つと思っている。意識の違いや温度差を感じることがほとんどですが、その中でも気持ちを共有できる教員に出会ったときに、楽しく活動をしていたときのような情熱が込み上げてくる。

・実際にフィリピンを訪れ、フィリピンで見てきたこと、感じたことを共有でき、同じ想いを持って活動に取り組んでいる先輩や同級生たちが、こんな自分に何が出来るのだろうと悩んでいた私の大きな支えとなった。初めて参加するイベントのONE LOVEブースで、フィリピンの現状やONE LOVEの想いを真摯に伝える先輩たちを見て、沖縄の人たちにこんな風に発信することが出来たらと感動し涙したのを覚えている。

・人種や相手の置かれている立場に関係なく、分け隔てなく人々と関わることを今の生活に活かしていきたいと考えている。また、フィリピンを訪れて、家族同士の絆や、

コミュニティー全体で地域の子どもたちの面倒をみることを知ったことから、現在の生活に、家族を大切にし、まわりの人々と助け合いながら生きていくことを活かしていきたい。

３．解散に伴う心残りや課題点

・ONELOVEの活動を継続、またはONELOVEで出会ったメンバーに会って話をする、聞く機会が今も保持することが出来たら、私のココロやより豊かなものになるであろうと感じる。そんなONELOVEが解散してしまった現在、寂しさと力になれなかった事に対する申し訳なさが残っている。

・団体を解散する前は、活動から離れてしまっていることに申し訳なさや後ろめたさを感じていた。卒業してからの自分は学生の頃のようにどっぷり参加できなくて、どこか人任せになってしまっているなと。そんなモヤモヤを抱えていた状態での解散で、心残りもすごくあった。

・科目履修生としてキリ学に戻りながら事務局と関わるなか、私たちが立ち上げた頃より学生も減り、事務局の体制が苦しんでいることに気付きはじめ、当時事務局長と今後のONE LOVEについて話し合うことが増えた。結果、私が引き継いで事務局長を務めることになったが、事務局長になってみて改めて、人手不足の目の当たりにし、何度も事務局の体制について考えてきた。それと同時に出前授業の形、現地との関わり、資金不足など問題点もたくさん出てきた。解散については、未だにこの決断が正しかったのか悩むこともある。現地の人々の生活に足を踏み入れ、こちらの勝手な決断で支援を終わらせてしまった。彼らの生活に関わった以上中途半端なことはやってはいけない、一生関わる気持ちで居ると学生の頃は思えた熱い気持ちも、やはり金銭的な面で苦しくなると正直そういう気持ちも、気持ちだけではどうにもできないという現実にぶつかった。

・卒業とともに関わりが薄くなっていったしまったことに申し訳なさを感じていた。それぞれ新しい関わり方をしながらも持続的に参加し、組織も存続し、後輩に活動が受け継がれていくことを理想としていたが、解散となったことに寂しさと自己嫌悪感とともに安堵感など複雑な気持ちを覚えた。

・現在社会人として「会社員」という本業を抱えているが、学生時代のように副業的にONE LOVE活動をできればよかったが、実際は全くその時間が取れなかった。ONE LOVE解散に至るまでに、その他の可能性を示すだけの活動ができなかったと責任を感じている。

・１つは、資金面だ。学生には、圧倒的に資金面では乏しいところがある。大学からの支援にも限界があり、活動をしていく上では、継続的に支援をしていただける支援者（フォロワー）が必要になる。そのうえで必要になってくるのが、２つ目に不足と感じたプレゼンテーション能力である。社会人になって感じたのは、プレゼンテーション能力に長けている人、論理的思考を持っている人がたくさんいて、それは、ボランティア活動を行っていくうえで、フォロワーを集めるうえで、重要なものの１つだということに気付いた。

・ONE LOVEを離れた現在、日常に追われ、学生時代のように動けないことに憤りを感じている。もっとONE LOVEの活動を続けていきたかったと思うが、自分のキャパを超える業務内容に正直学生の時の楽しさよりも、大変さを感じることが多かった。

・申し訳ない気持ちが強い。沢山動いてくれた人達、自分の時間を犠牲にしてまで頑張っていた事務局の皆さんに本当にありがとうと伝えたい。そしてフィリピンの皆。活動が終えてしまった事でどんな負担があったのだろうとよく考える。

・活動に踏み出す恐怖心もある。また、あの時のストレスを抱えたらどうしよう、苦しくなったらどうしようと感じる。正直、法人化をスタートさせた時からの活動は、後半苦しいものだった。たくさんの方々の支えや助けを得られ、活動を続けることができたが、自分の生活と活動を天秤にかけるプレッシャーがもの凄く大きかった。最後まで活動を全うしなければいけないという責任感に潰されそうになっていた。自分や活動に対し、ネガティブな気持ちしか持てず、多くの人に迷惑をかけたという気持ちが残っている。今まで出会った人たちの事を考えると、申し訳ない気持ちでいっぱいだ。

・卒業してからは、みんなそれぞれ仕事やプライベートが忙しくなかなか活動に参加することが難しくなっていったが、そうなることは何となく予想できていたはずだ。卒業前にもっとしっかり卒業後の活動への関わり方をみんなで話会うべきだったと後悔する気持ちが残っている。また、在学生と卒業生の関わり方、活動の引き継ぎなど、前例がなくスムーズにできなかったことも残念だ。

・ONE LOVEやフィリピン、ネパールの人々と深めた絆も、今は遠い昔のような感覚があり、とても寂しい。

・法人化してからは、楽しさを感じるというより、団体を継続させる、という現実的な面が大きく、精神的なキツさが出てきたのは事実だった。

・小さな活動が大きくなるにつれて、活動を続けていくには、時間とマンパワーが必要だと感じ、卒業を前に焦りや不安を感じていた。卒業後もONE LOVEの活動に関わりたいという自分の意思で、事務局メンバーとして活動して

いたものの、仕事が始まると、両立がうまくできない自分に苛立ち、自分の時間を欲する自分勝手な気持ちや、他のメンバーへの負担を考えると申し訳ない気持ちで、心苦しさから事務所に足を運ぶのもきつかった時期があった。楽しみながらの活動がどこか義務的に感じ始めてしまい、いつのまにか楽しむ余裕がなくなっていった。もっと出来ることはあっただろうと後悔してもしきれないが、私以上に事務局を支えてくれた仲間には、負担や重荷を感じさせてしまっていただろうと申し訳ない気持ちは今でも消えない。

・参加したくても、授業や実習、アルバイトでほとんど時間がとれなくて、残念だった。もっと、深く関われば良かったなと思っている。

・自分がもう少し辛抱強く、活動に協力的であれば、周囲に声かけをするなどして陣営を集め、解散を免れたんじゃないかと思い後悔している。特に事務局メンバーの先輩達は大変だっただろうと思う。

4．将来に期待を込めて

・いつか本業をもう少しうまくこなせるようになり、時間の余裕をうまく生み出せるようになったとき、なにか社会活動の取り組みに参加できればと考えている。願わくばみんなのタイミングが合い「ONE LOVE」の活動がまた再びできればなと期待もしている。

・時間が経ち、最近は冷静に活動を振り返ることができるようになった。正直に自分の気持ちにも向き合えるようにもなった。ONE LOVEの活動が持っていた多くの可能性に改めて気づき、色あせない大切な出会いを振り返ると、心が温かくなる。そんな気持ちを感じると、活動に対する想いが込み上げ、今の私なりにできることは何だろう、自分の生活や家族を持ちながらできることはなんだろう、と考える。まずは教師として身を立て、可能性を広げたいと思っている。

・団体としての歩みは一度止めて、それぞれ活動に参加していく今の状態が、私にとってはベストだ（そう今は感じている）。解散してもONE LOVEはONE LOVEだし、YOGA FOLPのみんな、MSCHの子どもたちとも、ずっとずっとつながっていけたらと思う！

・解散後もメンバーとの交流は回数は少ないながらも続いている。このつながりが消えない限り、それぞれ住む場所や環境が違っても、どんなに仕事や家庭が忙しくても、きっと近い将来自分たちの身の丈にあった活動が再開できる！その可能性は0じゃない！！という気持ちが心の片隅に存在している。きっと、他のメンバーもそうだと思うし、そうあってほしいと願っている。

・ONE LOVEの活動中は自分には専門性が何もないとずっと感じていて、もっと自信につながる何かを得たいと思っていた。疲れていたのもあるけれど、ONE LOVEでの活動を通して自分の未熟さを知り、自分のやりたいことを見つけることができた。今はONE LOVEを離れて、よかったと思っている。違う分野の仕事もできるし、人との出会いもある。今まで見れなかった世界で、ここからたくさん学びたい。毎朝通勤時に嗅ぐ排気ガスと朝の空気でフィリピンを感じ、また毎日通勤途中や職場の近くでネパール人をみている。それだけで嬉しくなるし、将来沖縄で働く外国人のために自分は今の職場で頑張れると強くなれる。ONE LOVEに苦しんだ時期もあるけれど、自分の気持ちの根本にはONE LOVEでの出会いや経験があるんだなって思う。

・2年前にフィリピン研修に行き、何名かのお友達は今でもSNS等で交流が続いている。縁が出来たことに感謝。また、彼らに会いに行きたいと思い、日々暮らしている。

5．大学への提案

・キリスト教学院にとって、ONE LOVEは必要な団体だったと思う。実際活動を行う中で、ONE LOVEに入りたくて入学を希望する学生が多く、ボランティア活動に興味がある学生にとっては、授業以外での実践活動が大きな影響を与えると思う。また、英語を学びたい学生にとっても、活動を通して、英語をただの言語ではなく、ツールとして使うよいきっかけになると思う。また、英語＝アメリカ英語ではないということを知るきっかけにもなる。もしかすると、保育科の学生もONE LOVEの活動を通して、海外の子どもたちのこと（保育、という視点だけでなく、様々な文化や社会の中で生きる子どもたち）に興味を持つきっかけにすることもできたかもしれない。

　きっと、今の学生の中にも、何か行動をしたいけれども、一人では何もできない、自信がない、と思っている学生がいると思う。そんな学生たちが行動するきっかけ、機会、場所、支援を提供する場が、大学であってほしいと思う。

第2節 ONE LOVEを見守ってきた関係者（教職員）へのインタビュー内容

　ONE LOVEにアンケート調査を行う中で、大学関係者からの支援を受けていたかも併せて聞き、関わった人の名前も挙げてもらっていた。その名前が挙がった数多くの中から3名の教職員に対し、以下３つの質問を行った。その質問意図としては、ONE LOVEの果たしたことを振り返り、ONE LOVEに対する必要な支援および位置づけが大学としてなされていたかどうか検証することを目的としている。

1. ONE LOVEとの関わり、自身の役割について
2. ONE LOVEの活動で評価される点
3. ONE LOVEが活動していくで、必要な支援は届いていたのか、足りなかったところ
4. その他

以下、1〜4に関してインタビュー内容を掲載する。

1. ONE LOVEとの関わり、自身の役割について

・学生に何かをしてあげたと、彼らのためのやったという実感はなかった。NPO法人化を行った後からは幹事役、施設借用等に関して関わっていたくらい。とてもしっかりしていて、何かをやってあげるような弱い立場の組織ではなかった。

・国際平和交流文化センターを立ち上げ、そこに集って学び合っているメンバーを通して活動を遠くから見守っていた。大学内でONE LOVEの情報共有がなされていなかったため、学科会議等で活動状況を広報する手伝い、助成金申請で西原町へ共に出向く活動を行った。活動報告を授業の中で何度か出前授業という形でお願いする中、関わった。

・一期生の学生会で頑張って活動を行っているメンバーと共にクリーンキャンペーンから始まり、授業科目を通じて学生と初期の頃、ONE LOVEの活動を始めた。相談役、顧問、アドバイザー等、いくつかの役割を担っていたと思う。しかし、距離感の取り方の難しさファシリテーターなのか、教育者なのか、どこかに導かなければならないのか、いつまで関わるのか。教員との絡みの中で生まれて、絡みで進んでいくことなると、どこまでやるのか、立ち位置がみえにくくなった。学生ではない自分がどうかかわっていくのかすごく難しいと感じていた。

2. ONE LOVEの活動で評価される点

・今時の学生さんですが、人が変わっていく、影響を受けていく様子、そしてその人の周りが変わっていくようすが見えたことに凄さを感じた。エネルギー、身近な小中高校への出前授業等にどんどん出て聞く様子を拝見していて、ここまでやるんだと感じていた。

・当初は大学のサポートがあっての活動だと思ったが、実はそうではなく自分たちの力で行っているということ。国境も超えた活動を行っているということ。イベント、人集め、募金活動を何でも自分でもやっていることが素晴らしい。

・ONE LOVEという組織に対してはあまりその意識は浮かばないが、一人ひとりの顔や生き方が浮かんでくる。ただ単に迷える子羊とは違うONE LOVEメンバーは優しい、何かしたいと願い、集う学生の集団であった。社会の機運を読みながら、しっかりとした信念、何かを持っていたと思う。就職先やそれぞれの立ち位置の中で、自身で見つけた目標に進むために、今の人生を歩んでいるのではないか。愛、自由、平和という言葉を使ってさえいれば社会を変えられるような理想主義ではなく、もっとより行動に移すことが出来る一人ひとりであったと思う。

3. ONE LOVEが活動していくで、必要な支援は届いていたのか、足りなかったところ

・社会的な活動をする団体、ボランティア支援など、専門家などのアドバイス、助言、などを行う人員体制の不足があげられる。大学全体としてボランティア・社会的な活動支援体制は課題の一つである。国際ボランティアにあこがれて入学してくる学生がいる、それを謳っている以上、考えなければならないと思う。

・ONE LOVEそのものの情報が伝わっていなかったし、大学としての位置付けが見いだせなかった。対外的には大変素晴らしい評価を得ている活動に対して、学内としても評価し、位置づけていくことが大事だったと思う。

4. その他

・ONE LOVEの解散を聞いた時に、残念な気持ちと少しほっとした両方の気持ちがあった。解散総会の際に、どなたかの発言「ONE LOVEを嫌いにならないうちに辞めたい」に尽きるんじゃないかと思った。大学生でここまでやれるんだという感心の反面、社会に出たときに、そういう職業に就ければよいのだけれど、理想と現実の中でONE LOVEのメンバーがやってきたことが活かせる仕事、親御さん、どのように感じているか心配になることが時々あった。ただ、私の見方が短絡的だったかもしれませんが、ONE LOVEとして食べていければよいですが、そうでない目の前の現実があるのかなという気持ち。

（インタビュー内容、終了）

第3節　インタビューを通しての考察

ONE LOVEと何らかの関わりをしていた教職員3名の方へのインタビューから見えてくることは、ONE LOVEは外部からの働きかけがあったけれども、基本的にメンバー自身で成長していったということである。ONE LOVEの関係に関しても、大学の職務という枠を越えて、活動に共鳴した個人としての関わりであることも読み取れる。

ONE LOVEの活動年表を見ていると、数多くの受賞歴、助成金獲得の経緯を見ても、大学外での評価は非常に高いといえる。短期間で成長・発展していった。大学の枠を越え社会的な評価を得ていたONE LOVEであったが、学

内での評価及び位置づけができないまま、ONE LOVEとの関係を終えてしまったかもしれない。NPO活動であるので、未来永劫に発展していくことが目的ではなく、社会的な役割を失えば解散という形は自然な流れである。また、解散という形は大学からの支援有無に関わらず自らで選んだ結果である。ONE LOVEを含めた今後の大学としての位置づけ、支援の枠組みに関してはこれからも考慮していく必要性があると感じ、引き続き懸案事項の一つとして記しておきたい。

おわりに

本稿を完成させるにあたりアンケートに快く答えてくれたONE LOVEのメンバー、インタビューに答えて下さったONE LOVEに関わってきた支援者に感謝したい。一人ひとりのONE LOVEに対する思い、ONE LOVEが残した軌跡の中に、貴重な材料が詰まっている。結成から9年が経ち、解散から約半年という月日が流れ、一つ、ONE LOVEの活動史が出来上がった。窓口になってくれた卒業生は、教職現場、会社員、家庭、海外、進学先と様々な場面で自分らしく生きているのが伝わってくる調査であった。

ONE LOVEメンバーがフィリピンやネパールの貧困や不条理な現実に涙を流し、実施に国境を越えた姿を目にしたあの頃が鮮明に蘇ってくる。その勇気、信じる気持ち、社会に向き合った実直な気持ちは一人ひとりの中に生きており、かなり有益であるといえよう。

ONE LOVEの会報誌や残した資料に目をやると二つのコラムが目についた。

■2011年の会報誌

「私たちの前を歩かないで下さい。私たちはあなたの引っ張られたくありません。私の後ろを歩かないで下さい」

フランスの思想家、アルベール・カミュの言葉です。これまで、大切な相手の事を考えるあまり、つい手を引っ張りすぎてしまうこともあったかもしれません。でも相手を信じて共に歩む大切さをONE LOVEの活動から学びました。これからも大切な仲間と手を取り合って、共に歩んでいこうと胸を熱くする今日この頃です。

■2012年会報誌（3号）

いつもうつむいてはいけない いつも頭を高くあげていなさい。世の中を真正面からみつめていなさい。（ヘレン・ケラー）

この言葉と出会ったのは、私が初めてフィリピンへ訪れたあとのこと。

初めてのフィリピンは、私にとって目に映るものすべてが衝撃でした。あまりにも日本とは違う環境の中で、目を背けたくなる場面にも出会いました。心の中の葛藤もありました。どう答えを出したらいいのかもわからずに自問自答を続けました。

でも、世界で起きていることは決して自分たちとは無関係じゃないと知った時、まっすぐ目をそらさずに目の前に起きていることをしっかりと見つめることの大切さを感じました。

引用終了

本調査を通して、ONE LOVEの活動歴をまとめ、参加メンバーの志やそれぞれの人生や進路へ活かされている点から学ぶべき材料の多さに改めて気づかされる。しかしそれと同時に、これからも社会的な活動を支援する方法について改めて考えていかなければならないと感じている。

ONE LOVEの引用したアルベール・カミュ「私たちの前を歩かないで下さい。私たちはあなたの引っ張られたくありません。私の後ろを歩かないで下さい」のように、前を歩かず、引っ張らず、学生と共にある活動、大学のあり方、教育者の姿勢が問われていると言えよう。

調査コメントを読むと、真剣にONE LOVEの活動に打ち込んでいた学生ほど、解散という選択肢をまだ消化しきれていないことも伺える。今後の方向性について何からなすべきか考え続けている者もいる。ONE LOVEとしての活動は終えても、それぞれの社会参加は終わっていないし、継続されていくと考えられる。

ヘレン・ケラーのいうように「いつもうつむいてはいけない　いつも頭を高くあげていなさい。世の中を真正面からみつめていなさい。」まさにその通りであると思う。このONE LOVEの歴史を整理した中から私たちが行うべき活動を一つひとつ整理し、今後も学生と共に社会に向き合う学び、活動を展開していくことが大事であり、正面から向き合っていきたいと願っている。本稿ではONE LOVEの活動に参加した学生OB・OGおよびONE LOVEの活動支援に側面的に関わった教職員の意識をまとめることに焦点を当てたものになり、具体的な学生の活動支援の方向性までは指し示すことはできなかった。今後、学生の活動支援の可能性や具体的な方向性に関して研究し続けることを祈念し、本稿を終えたいと思う。

【参考文献】

ONE LOVE設立趣意書（2011年4月）

ONE LOVE会報誌１号（2011年発行）

ONE LOVE会報誌３号（2012年発行）

Fairtrade Label Japan ホームページ

http://www.fairtrade-jp.org/about_fairtrade/

（2014年10月引用）

内閣府NPOのイロハ ホームページ

https://www.npo-homepage.go.jp/about/npo.html

（2014年10月引用）

註

[1]（NPO法人）開発教育協会（在東京）が発行した教材で、世界の不均衡を教室の中で簡単にできる貿易ゲームとなっており、白熱したゲームを通して貿易から生じる世界の不平等を体感するものである。

[2]同上の団体が発行した教材で、２００１年の世界同時多発テロ後に、世界中をインターネットを通じて回った「世界がもし100人の村だったら」という詩をわかりやすいシュミレーションゲームにして世界の人口、男女、人口構成、富の格差などを学ぶものである。

[3]ONE LOVEの活動日誌や総会資料を基に主な事業、イベント等を抜き出し筆者が年表としてまとめ、長年事務局を担当していた、岸本佳子さんに確認を依頼し完成させた。

[4]フェアトレードとは、直訳すると「公平な貿易」。つまり、開発途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することにより、立場の弱い開発途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指す「貿易のしくみ」をいう（Fairtrade Label Japan定義より）。

[5]フィリピン国の地方地域に暮らす住民たちが仕事を求めて首都マニラに移り住む中、土地や家を持たない層が線路脇に細々と家を建てて暮らす人びと。政府当局からは不法占拠者としての扱いを受けている。

[6]Morning Star Children's Charityという何らかの形で親が子どもを扶養できなくなった児童養護施設。現地教会ネットワークの一つ。

[7]草の根技術協力事業は、国際協力の意志を持つ日本のNGO、大学、地方自治体及び公益法人等の団体による、開発途上国の地域住民を対象とした協力活動を、JICAが政府開発援助（ODA）の一環として、促進し助長することを目的に実施する事業

[8]ＮＰＯ法人とは、特定非営利活動促進法に基づき法人格を取得した法人のことを指す。ＮＰＯ法人を設立するためには、法律に定められた書類を添付した申請書を、所轄庁(本県であれば沖縄県)に提出し設立の認証を受けることが必要。提出された書類の一部は、受理した日から、２か月間縦覧し、市民の目からも点検される、その後NPO法人の認証を受ける。

[9]活動家の「燃え尽き症候群」と言われている